

発達障害のある大学生の就労支援 (自己理解から就職までの2つのモデルケース)

○西本 士郎 (神戸公共職業安定所 学卒部門 雇用トータルサポーター (大学等支援分))
 下司 実奈 (神戸女子大学 健康福祉学部社会福祉学科)
 北村 沙緒理 (神戸学院大学 学生支援センター)

1 背景

発達障害のある大学生の人数は、2010年から2020年の10年間で7倍に増えているが、2020年の発達障害のある学生の就職率は73.5%であり、学生全体の就職率98%に比し、かなり低い状況にある。そのような背景の中、2021年4月に全国11労働局に「雇用トータルサポーター (大学等支援分)」(以下「雇用TS」という。)が配置された。

雇用TSの活動は、学生だけでなく、大学支援、事業主支援と幅広く求められているが、本稿では、初年度にモデルケースづくりとして重点的に取り組んだ「大学と連携した発達障害のある学生の就職支援」をどのように進めていったかのプロセス、そしてそこで使ったコンテンツおよび成果について紹介したい。

2 障害を持つ大学生を取り巻く環境および課題

(1) 「障害者差別解消法」の影響

2016年「障害者差別解消法」施行に伴い、学生に対し大学側に「合理的配慮」の(努力)義務がある。大学では入学時にアンケートや面談などを通して修学支援には配慮がされつつあるが、障害者求人を選択した学生への就労支援は、大学内の組織連携・社会資源との連携等未だ十分とは言えない。

(2) 障害のある学生の課題

障害のある学生の多くは、就労に対して、自己肯定感が低く自分のやりたいこと・できること・長所・苦手なことなど「自己理解」が不十分であり、どう取り組んだらよいかわからない状態であることが多い。その混乱と不安は、一般学生でも困難な以下の場面が同時に押し寄せてくることで増幅される。

- ① 「修学」から「修学+就活」への移行と両立
- ② 進路選択 (一般求人か障害者求人か等)
- ③ スキルアップ (面接や筆記試験対策)

3 オーダーメイドプログラムの考案

発達障害のある学生と言っても一人一人特性は異なる。とは言え、全て個別にプログラムを設計していくのは、ノウハウやナレッジの蓄積という意味で非効率である。そこで「その学生に必要なオーダーメイドプログラム」というコンセプトで、1 インテーク、2 自分を知る、3 仕事を知る、4 自己理解トレーニング、5 自己PRスキル、6 定着スキルという場面毎に、これまで使っていたツール

(VRT・GATB等)の棚卸、新たなツールの探索(NIVR等)及び自ら開発したコンテンツを整理していった。そして、図1のように、各々のツール・コンテンツを製品の部品に見立て、ファンクションモジュールとして左の倉庫に保管し、そこから、その学生に必要な部品を組み合わせ、右側にプログラムを作成するイメージとした。例えば3年生から取り組む学生には“Early Start”の自己理解を中心としたプログラム、4年生から取り組む学生には“Compact”の自己理解から自己PRスキルの修得までのプログラムを標準とするというようなことである。

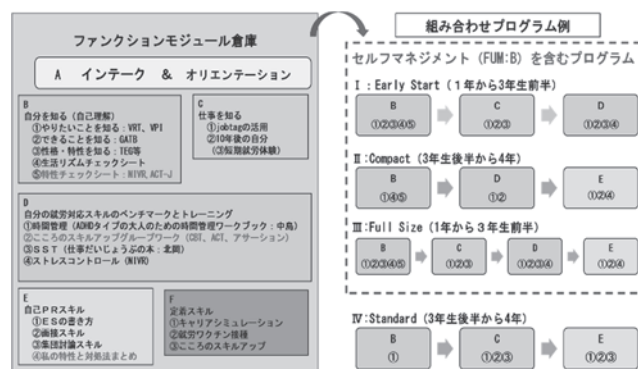


図1 その学生に必要なオーダーメイドプログラム

4 大学との連携のプロセス

モデルケース作りに協力していただける大学に対し、趣旨と進め方を共有した。ポイントは、本人・大学と同じ

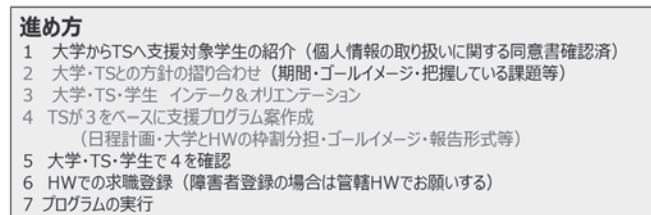


図2 大学との連携の手順

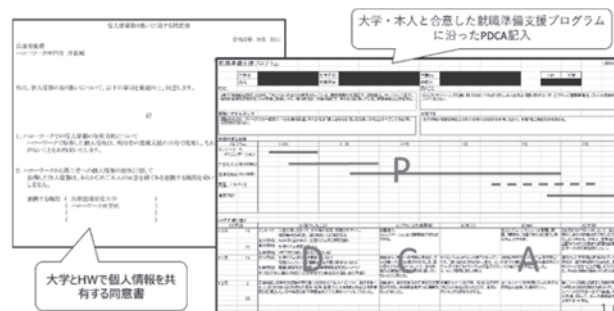


図3 大学との連携コンテンツ

クトルでプログラムを進めるため、①スタート前の支援プログラムを本人・大学とオーソライズする、②支援する過程でその都度、やったこと (D)、計画とのずれ (C)、ハローワーク・本人・大学の思い (A) を確認しながら合意のもと進めていくということの2つである。

5 実際の支援と成果 (2021/10-2022/3)

(1) モデルケースA：自己理解と進路検討まで

Aさん大学3年生 (当時)

診断名：アスペルガー症候群

プログラム：Early Start

■目標

3年終了時まで、自己理解のうえ進路検討

■成果

自己理解を経て、オープン就労を決定

■困りごと

コミュニケーションが苦手、マイペースでいつもぎりぎりにならないと行動できない。あまり困り感はないが、アルバイト経験がなく働くイメージが掴めず、就活をどう進めていいかわからない。

■使用したツール・コンテンツ・その他

①インテーク&オリエンテーション

「自分を知り社会資源を知り納得のいく進路選択をしよう」「楽しさ人生カーブ」

②自分を知る

「VRT」「生活リズム表」「大学からの情報 (過去含む)」「診断情報 (WAIS-III)」「特性チェック表」

③仕事を知る

「求人票検索&検討」「短期アルバイトにチャレンジ」

④スキルアップトレーニング

「こころのスキルアップトレーニング」

■成果物

- ・自己理解アプローチシート
- ・私の特性と対処法

■支援を通じた本人の変化

①②を進めていく中で相談者との信頼関係も醸成され、漠然とした不安は軽減し、主体的な言動が増えた。また、自身の強みを知ることで、自己肯定感や就労意欲の向上に繋がり、自らアルバイトに挑戦することを決めた。

③を進めていく中で、働くことのイメージや得手・不得手などリアルに感じ取ることができ、4年生に進級後は、障害者雇用求人を中心に、積極的に就活を行っている。

(2) モデルケースB：自己理解から就職まで

Bさん大学4年生 (当時)

診断名：ASD/ADHD

プログラム：Compact

■目標

①4年生12月までに卒論等を完了および進路決定

②3月末までに内定をゲット

■成果

①4年生11月卒論、12月短期専門学校修了、1月初旬障害者求人応募

②2月末第一志望企業に内定

■困りごと

大学3年の時、アルバイトやインターンシップでのコミュニケーションがうまくいかず受診。自信がなくキャリアセンターにも行けず、どういう進路選択をしたらよいかもわからない。また、卒論・短期専門学校・就活の並立に困っている。面談中ずっと泣いている。

■使用したツール・コンテンツ・その他

モデルケースAと重複しないものだけを記す。

①インテーク&オリエンテーション

「卒論・短期専門学校・就活のスケジュール作り」

⑤自己PRスキル

「エントリーシート・自己PRシートの書き方」「面接スキル」

■成果物

- ・自己PRシート
- ・私の特性と対処法

■支援を通じた本人の変化

障害者雇用を含む進路選択の話になると涙が止まらず、メリットは理解できているが受容できていない様子が伺われた。しかし、1か月後、家族と相談して障害者求職登録と手帳の申請を決意。

卒論・短期専門学校修了・就活のタスクを並列タスクから直列タスクに変更した。卒論を最優先、終了後短期専門学校を年内に終了させ、1月から就活に集中することとした。気持ちの整理ができ、自信がついたようであった。

1月にはすっきりした表情で地域の障害者面接会に応募し、「エントリーシート」と「私の特性と対処法」を作成した。このころ手応えを感じたとのこと。面接では「私の特性と対処法」を使って自分の障害や配慮ポイントについて話すことができ、第一志望企業に内定した。

6 今後の進め方

2つのモデルケースを基に、県下の大学との連携を幅広く進め発達障害のある学生の支援を水平展開していきたい。

また、大学とハローワークだけの連携ではなく、地域障害者職業センター・障害者就労移行支援事業所・就業体験提供者等も含めたシステムチックな連携を目指し、利用者の自己理解とスキルアップの選択肢を増やしたい。

【参考文献】

- 1) 2010,2020 学生の就学支援に関する実態調査結果 (独立行政法人日本学生支援機構)、
- 2) 2020 大学卒業者の就職実態調査 (厚労省・文科省.)